

## レクラム文庫の特徴と理念 — 創刊 130 周年に寄せて —

鈴木 将 史

### 目 次

1. 序
2. レクラム文庫成立の背景
3. レクラム文庫の特徴
  - 3.1. 初期ラインナップよりの考察
  - 3.2. レクラム書店自体の特徴
  - 3.3. レクラム文庫自体の特徴
    - 3.3.1. 営業面から見た特徴
    - 3.3.2. 編集面から見た特徴
4. まとめ

### 1. 序

ドイツ国民の万事における徹底した仕事振りは、その国民性の一大特徴として、折りに触れて引き合いに出されてきた。例を引けば、卑近なものから遠大な構想に至るまで、枚挙に遑がないだろうが、敢えて代表的分野の一つ挙げよというのならば、書籍出版業界をその典型的発露としたい。中でも、グーテンベルク以来、先進的な役割を果たし続けたドイツの出版界が、その特性を最も遺憾なく発揮した分野は、辞典・全集・叢書といった所謂継続出版物においてである。その事例としては、完結まで優に一世紀を要したグリムドイツ語辞典の例を引くまでもなく、現代においても、極めて長期に渡る出版事業が散見される。

例えば、1952年から刊行が開始された“Romanführer”（『小説案内』）全32巻は、現在も尚刊行中であるし、1978年に分冊形式で刊行が始まった『ゲーテ辞典』は、今もってFの後半あたりまで刊行作業が進捗したに過ぎない。また、1943年（！）に国家の威信をかけてワイマールで開始された『国民版シラー全集』の刊行は、東独時代を経ても尚終了せず、実に半世紀以上に渡って出され続ける類稀な個人文学全集となっている。そして、この様な出版傾向の集大成ともいえる計画が、“Bibliothek Deutscher Klassiker”（『ドイツ古典叢書』）であろう。ドイツ語圏の古典（文学・哲学・政治・歴史など）を余すところなく出版し尽くすべく、それ専門に設立された出版社から1985年より毎月1巻程度のペースで出版され続けているこの叢書は、その全貌を杳として現さず、（500冊は越えるのでないかと言われているが）この先一体何十年間出版され続けるものか見当もつかないという代物である。先述した『国民版シラー全集』がその完結を見ぬ内に、この叢書でもまた『シラー作品集』全12巻の刊行が開始された。厳密な校注が施された決定版的な個人全集が2通り、編纂スタッフも重複して刊行中であるという珍しい事態は、ドイツの出版事情ならではといえるかも知れない。

さて、以上の様に、こと原典批判版や辞典の出版については決して妥協を許さないドイツ出版界だが、廉価版書籍に関しても、その姿勢は色濃く認められる。その代表格が、今年で創立130周年となるレクラム文庫であることに、意義を唱える者はいるまい。岩波文庫がその範をとったと公言して憚らない「世界文学の高山連峰」(R.ツォーツマン<sup>2)</sup>)レクラム文庫(正式には“Universal

-Bibliothek” [『世界文庫』]) は、そのサイズのみならず、我が国の廉価版書籍出版に大きな影響を与えてきた（筆者の知る限り、日本の文庫本はレクラム文庫サイズに最も近い）が、その沿革については、節目となる年ごとに詳細な資料が出版されてきた<sup>3)</sup>。従ってその点についての記述は最小限に留め、小論ではこの文庫が創刊以来保持してきた特徴と理念について考察してみたい。

## 2. レクラム文庫成立の背景

レクラム文庫を刊行するフィリップ・レクラム・ユング書店は、アントン・フィリップ・レクラムが父カール・ハインリヒ<sup>4)</sup>の始めた「文学館」（“Literalisches Museum”：閲覧ホールを備えた貸本屋。とはいえ、当時のヨーロッパ中の雑誌に加え、蔵書は7万冊に上るといふ、立派な「図書館」機能を備えた読書サロンだった。）を土台に、1828年ライプチヒで創業した。この「文学館」では、折しも勃興の兆しが見え始めた「青年ドイツ派」運動と呼応して、自由主義的知識人達が文学的にのみならず政治的にも盛んに交流し、創業期のレクラム書店は、自由主義運動に強く裏打ちされた政治的出版活動を展開することになる。特に、青年ドイツ派作家 H.ラウベと共に行った、時のポーランド開放運動に対する出版界からの支援活動は、発禁も含めたプロシア政府との激しい軋轢を生み、一時は書店の所在地を偽らざるを得ない程に「札付き」の急進的出版社と見なされていたのである。3月革命（1848）を経るまでこの状態は変わらず、ウィーン体制を糾弾するべく、反オーストリア・ハプスブルク的な出版活動は続き、ついにはオーストリアでの営業禁止命令を当局より受けるに至る。もっとも、当時の進歩的な出版社は、レクラム程ではなくとも反オーストリア的な傾向を有しており、既に有力出版社であったカンペやブロックハウスもその例外ではない<sup>5)</sup>。しかし、当時弱小出版社であったレクラム書店のしたたかさは、一方で発禁さえ厭わぬ程にポーランド支援、ウィーン体制打破を声高に叫び続けながらも、他方では一般大衆に巧みに迎合した雑誌を発行することにより、その経済的基盤を着々と築いていった点にある。その雑誌とは、共に1842年に創刊された『シャリバリ』（“Charivari”：後に『ライプチガー・シャリバリ』と誌名変更：1842-51）と『ライプチガー・ロコモティーヴェ』（“Leipziger Lokomotive”：1842-43）である。この内『シャリバリ』は、知識階層を対象とした辛口の文芸総合誌であり、穏当な売れ行きを示したが、労働者階層に向けて編集された『ロコモティーヴェ』は、あからさまな表現に彩られた極めて急進的な紙面により、爆発的な人気を博した（最盛期に約20000部）。だが、保守的なイエズス会信者を「あの犬畜生共は叩き殺すがいい。実にくだらん太者達だ。」と嘲るなど、余りに過激な発言を繰り返したため、創刊翌年には発行許可をザクセン警察から取り消され、廃刊の止むなきに至る。（死亡広告の体裁を取って、「喪主」の編集長から読者に公表された廃刊通知にまで、この雑誌の諧謔精神を窺うことが出来る。<sup>6)</sup>）この事件からも明白な様に、創業期のレクラム書店は、現在の姿からは想像もつかない程、政治色の強い反体制的な出版社だったのである。

もっとも、古典作品を扱おうとした当時の「まっとうな」出版社には、著作権という厚い障壁が立ちだかっていた。当時の著作権法は成立の緒に就いたばかりで、ドイツ語圏の各国により異なり、何よりも期間が明示されていなかったため、実際にドイツ語古典作品の出版が可能だったのは、コッタなど作家自身と個人的な関係を深めていた少数の出版社に限られていたのである。（この様な背景のもとに、海賊版が横行していたのも事実である。）ただ、この時代の著作権は作家の自国内でのみ発効していたため、外国作品の翻訳出版に関しては、何の制約も受けることはなかった。そこで、新進の文芸出版社が古典作品を手掛ける際には、外国作品を抜きにして考え

ることは出来なかった訳である<sup>7)</sup>。この状態は、1867年のドイツ連邦間における著作権協定及びヨーロッパ内の加盟国が1886年に著作権に関して締結した「ベルネ条約」まで続くのだが、1850年代には印刷技術の向上と共に、時ならぬ「シェークスピア・ブーム」がドイツ出版界に巻き起こる。1830年代に既に出されていたヴィーガント社からの全集をはじめ、クレマン社、ライマン社、オクターヴ社そしてメッツラー社といった出版社が、シェークスピア作品の廉価版全集出版に手を染める<sup>8)</sup>。(しかし、翻訳そのものは旧版の使い回しが多かった。)この様に、雨後の筈もかくやとばかりに全集が相次ぐ中、最終的にこの競争を制したのが1858年に刊行されたレクラム版であった。その価格(2ターラー)は現代の書籍価格の相場でいえば35マルク(2500円)内外である。この価格でも充分成功を収めることが出来た当時の書籍業界に、レクラム文庫が突きつけた2グロッシェン(100円強)という価格が、正に「価格破壊」とも呼ぶべき強烈な衝撃を当時の読者層に与えたであろうことは、想像に難くない<sup>9)</sup>。

シェークスピア出版競争はレクラム文庫発足直前まで続き、1867年(つまりレクラム文庫の設立年)には、2グロッシェンでサイズも文庫本とほぼ同じという、シェークスピア作品集がレクラムから出されるに至る。レクラム文庫はこの本の装丁を少し変えただけであるから、廉価版シェークスピア出版競争の行き着いた先がレクラム文庫であったといっても過言ではないだろう。しかし、これはあくまで廉価本出版のノウハウに関してであって、Universal-Bibliothekの理念を実現するにあたっては、同年のドイツ連邦間における著作権新協定を見逃す訳にはいかない。即ち、この年より、作家の著作権は死後30年間保護されることとなるが、その後は例外なく自由となり、ドイツ古典作品を文字通り全出版社並びに全ドイツ国民の共通財産にすることが可能となったのである<sup>10)</sup>。「一般の興味を喚起する我が国の古典文学全体の出版<sup>11)</sup>」を標榜するレクラム文庫発足のタイミングは、技術及び制度が整うこの1867年において他になかったといえよう。

ここで「文庫本」という概念を整理しておきたい。単に小型本というだけならば、その歴史は印刷物の歴史と同程度に古い。既に1500年代前半に、イギリスではラテン語学校教科書用に4つ折版の小型本が作られているし、同時期にベニスでも8つ折版の古典叢書が出版されている。更にはフランスやオランダで16折版という「豆本」が人気を博したりするが、いずれも一部の知識階層を対象とした小規模な企画であり、本そのものにも装飾的性格が付随していた。対して近代の「文庫本」出版は、不特定の読者層を啓蒙するべく、廉価で簡素な小型本を大量に出版するところにその特徴がある。こういった類の書籍の嚆矢は、イギリスで1777年から出された「ブリティッシュ・ポエッツ」シリーズとなっているが、ドイツにおいてはそれより半世紀程遅れた1826年、これもやはりイギリスで修行してきたC.J.マイヤーの手になる「グロッシェン文庫」の出版を、さきがけとするべきだろう<sup>12)</sup>。マイヤーはこの後も1886年からは「マイヤー国民文庫」(“Meyers Volksbücher”)を創刊し、文庫出版において一時期レクラムの強力なライバルとなる。しかし、同時に手掛けていた辞書・辞典出版に後世は出版活動の重点を移し、同様な出版社ブロックハウスと合併(Bibliographisches Institut & F.A.Brockhaus AG)した後は、マイヤー/ブロックハウス百科事典及びドゥーデンドイツ語辞典の出版を社の主力業務とした。爾来、同社がドイツ語圏レキシカの根幹を形成しながら今日に至っていることは周知の通りである。つまり、「一般国民の啓蒙」という目的に際しては、文庫出版と辞典出版は車の両輪の役割を果たし、ドイツにおけるそれぞれの代表格として、レクラムとマイヤーが存在する訳である。そして、マイヤーがかつて文庫出版にも積極的に取り組んだ<sup>13)</sup>ことや、反対にレクラム文庫には他に類を見ない程ガイ

ドブックが多いのも、両出版社の持つ本来の近似的な性格を示すものだろう。

レクラム文庫発刊までの背景について以上の様に概観してきたが、小型本出版の理念と実際を、ドイツは即ちイギリスから輸入・発展させたことになる。それもシェークスピアに負うところが大きく、その典型がレクラム文庫であるといえよう。その意味で、当初のラインナップを眺めてみれば、最初の100冊中にシェークスピアが24篇を占め、ゲーテ（11篇）やシラー（15篇）を遙かにしのいでいる事実も奇異に映りはしまい。

### 3. レクラム文庫の特徴

#### 3.1. 初期ラインナップよりの考察

前章からの続きになるが、文庫の基本的理念は、その創刊時のラインナップにおおよその輪郭を現すものである。これもレクラム文庫の大きな特徴のひとつだが、発行された各篇は、刊行順に通し番号が打たれている。従って、番号の若い本程、出版時期が早いことになり、現在発行されている目録だけで、それらの刊行状況を知ることが可能となる訳である。

通し番号が、文庫の発展状況を示すために打たれたことは明らかだが、特に一桁乃至二桁の通し番号を背表紙に戴く文庫に対して、レクラム書店が格別の敬意を払っていたであろうことも、想像に難くない。何故なら、130年前に刊行された100冊の内、先に挙げた数字で明らかな様に、シェークスピア、シラー、ゲーテが丁度半数を占め、全体でも今日尚65冊もの文庫が刊行中であるからだ<sup>14)</sup>。レクラム文庫を大枠において模範としたが、通し番号システムは採用しなかった岩波文庫の創刊時の100冊中、70年後の現在も入手可能なものは36冊である（詩集などの編者及び翻訳者が交代した文庫も刊行継続中と見なす）ことを考えれば、レクラム文庫のこの数字は驚異的と評してもよからう。事実、101番以降の状況を眺めてみれば、200番までの100冊の内、絶版を免れているものが28篇と激減し、それから201～300が22篇、301～400が17篇という具合に漸減していく。そして、1908年から1919年にかけて発行された5000番台が、現在最も多く絶版となっており、1000冊中で現在流通している文庫は僅か49篇に過ぎない。（しかも1914年に著作権の保護が解かれ、現在も発行されているワーグナー11篇[5635-5645]がこの中には含まれている。）この数字を見ても、レクラム文庫の看板ともいえる作品が、如何に100番までに集中しているかが理解されよう。逆に、そこからレクラム文庫の特徴の一端を垣間見ることが可能である。ここでは、特に重要な10番までの作品を見てみたい。そのラインナップは以下の通りである。（写真I参照）

1. ゲーテ：『ファウスト 第I部』
2. ゲーテ：『ファウスト 第II部』
3. レッシング：『賢者ナータン』
4. ケルナー：『豎琴と剣』
5. シェークスピア：『ロミオとジュリエット』
6. ミュルナー：『罪』
7. ハウフ：『ボン・デザールの乞食娘』
8. クライスト：『ミヒャエル・コールハース』
9. シェークスピア：『ジュリアス・シーザー』
10. レッシング：『ミンナ・フォン・バルンヘルム』

一見したところ、新旧の人気作品を機械的に列挙していったかに思える顔触れだが、文庫の門

出として選出されたこの10冊からは、興味深い思惑を推察することが出来る。まず、栄えある1番にゲーテの『ファウスト』をもってきた点は、至極当然な選択であろう。(現在はそうではないが)当時最も廉価の『ファウスト』の販売により、文庫出版活動を軌道に乗せるためにも<sup>15)</sup>、ドイツ文学最高の古典を頭に戴く意味でも、また戯曲重視の気概(この点については後に詳述する)を読者に知らしめる上でも、1番は『ファウスト』を置いて他にはなかった。出版社側の『ファウスト』に対する思い入れも並々ならぬものがあり、このモチーフに関しては、ゲーテのみならず、クリトファー・マロー、グラッペ、ハイネ、クリンガー、レーナウ、レッシング、ヴィッシャーなど、解説書も含めると実に17点がレクラム文庫で刊行されている。更に、120年以上に渡り1番という「貴賓席」(“Ehrenplatz”)<sup>16)</sup>を守り続けたゲーテの『ファウスト』については、創刊時の復刻版さえ出版されている。

次に、その他の古典的作家として、シェークスピアとレッシングがそれぞれ2点ずつ収録されている。前者の選択理由は既に再三述べてきた説明で充分だろう。ただ、レッシングに関しては、作品それ自体の評価としても、この位置に取り上げられるには何ら不自然ではないものの、ここにはアントン・フィリップ・レクラム個人の意向が強く反映されていると考えられる。即ち、彼は長年のフリーメーソンであり、同様にフリーメーソンに加入していたレッシング、中でも理論的な傾向を強く示す彼の『賢者ナータン』を愛好していたと伝えられているからである<sup>17)</sup>。そうして見ると、このリストに登場する3人の古典的ドイツ作家(レッシング、ゲーテ、クライスト)が、いずれも啓蒙主義、古典主義、ロマン主義を代表するフリーメーソンであるのも偶然とは思われない。更には、秘儀伝授のインスピレーションに強く裏打ちされた、極めてメーソンの色彩の強い『ファウスト』が先頭に据えられたのには、こういった意味合いもあったのだろうか。

さて、興味深いのは残りの3作家——ケルナー、ミュルナー、ハウフ——である。この内、前2者は、現代ではほぼ忘れられた作家といっても差し支えあるまい。ハウフにしても、『童話年鑑』や『リヒテンシュタイン』が、今日尚話題となる中、上掲の小説は既に過去のものとなりつつある。ところが、1867年当時、彼等は——全員が物故していたものの——それぞれ詩、戯曲、小説の分野で最も読まれていた流行作家の内の3人だったのである。これは、文庫創刊の辞で言明された「しかし、これ(筆者註:あらゆる古典作品を出版すること)によって、「古典」という形容

Im Verlag von **Philipp Neclam** jun. in Leipzig erscheint in regelmäßiger Folge unter dem Titel:

## Universal-Bibliothek

eine Sammlung von Einzelausgaben allgemein beliebter Werke.  
Preis jedes Bandes: 2 Gr. = 7 Kr. rhein.  
Jeder Band wird einzeln verkauft.  
Erschienen sind bis jetzt:

Band	Band
1. Goethe, Faust. Erster Theil.	23. Kobzar, A. v., Der Koschak.
2. Goethe, Faust. Zweiter Theil.	24. Hebel, J. W., Alemannische Dicht.
3. Lessing, Nathan der Weise.	25. Hoffmann, C. T. A., Das Fräulein von Scuderi.
4. Körner, Leyer und Schwert.	26. Schafspere, Die Kunst eine köstliche Socken zu stricken.
5. Schafspere, Romeo und Julie.	27. Beer, Michael, Der Paria.
6. Müllner, Die Schuld.	28. Lessing, Gedichte.
7. Hauff, Wilhelm, Die Wettlerin vom Font des Arts.	29. Kretsch, Donna Diana. Bearbeitet von C. A. West.
8. Kleist, H. v., Mich. Kohlhans.	30. Angelf, Reise auf gemeinschaftliche Kosten.
9. Schafspere, Julius Caesar.	31. Schafspere, Hamlet.
10. Lessing, Minna b. Barnhelm.	32. Hoffmann, C. T. A., Das Majorat.
11. Büchse, Ausgewählte Stützen und Erzählungen. Erster Band.	33. Schiller, Kabale und Liebe.
12. Schiller, Wilhelm Tell.	34. Müllner, Der Kaliber.
13. Schafspere, König Lear.	35. Schafspere, Kaufmann von Venedig.
14. Knigge, Die Reise nach Braunschweig.	36. Jean Paul, Campaner Thal.
15. Schiller, Die Räuber.	37. Lessing, Der junge Gelehrte.
16. Lessing, Miß Sara Sampson.	38. Schiller, Don Carlos.
17. Schafspere, Macbeth.	39. Schafspere, Antonius u. Cleopatra.
18. 19. Jean Paul, Dr. Ragenbergers Bedrüse. Zwei Theile.	40. Kleist, H. v., Käthchen von Heilbronn.
20. Mannb, Die Jäger.	
21. Schafspere, Othello.	
22. Hauff, Wilhelm, Jub Süh.	

An der Fortsetzung dieser Sammlung wird unausgesetzt gearbeitet. Ihr Umfang wird von der Aufnahme abhängen, welche dieselbe beim Publicum findet. Das Erscheinen sämtlicher classischer Werke unserer Literatur, die ein allgemeines Interesse in Anspruch nehmen und deren Umfang es gestattet, wird verprochen. Hierdurch sollen aber keineswegs Werke, denen das Prädicat „classisch“ nicht zukommt, die aber nicht desto weniger sich einer allgemeinen Beliebtheit erfreuen, ausgeschlossen werden. Manches fast vergessene gute Buch wird wieder ans Tageslicht gezogen werden — andere Werke sollen, in die „Universal-Bibliothek“ eingereicht, zum ersten mal vor's Publicum treten. Die besten Werke fremder und tochter Literaturen werden in guten deutschen Uebersetzungen in denselben ihren Platz finden. Da die Bände einzeln käuflich sind, ist Jermann in den Stand gesetzt, sich eine Bibliothek nach eigenem Geschmack und Bedürfnis zusammen zu stellen, ohne genöthigt zu sein, neben den gewöhnlichen, auch ihm vollkommen gleichgiltige Werke mit in den Kauf nehmen zu müssen.

写真 I : レクラム文庫創刊時の新聞公告

はそぐわぬにせよ、それにも拘わらず一般の人気を勝ち得ている作品が、除外されることがあってはならない。」<sup>18)</sup>という言葉の、創刊時からの忠実な実践である。古典と並んで、同時代の人気作家をも適宜出版していくというレクラム文庫の出版方針は、以降変わらず現代まで堅持され続けている。とはいえ、100番までは圧倒的に、ロングセラーとなるべき古典作品を配した中で、要の10番内に3点もの「非」古典を混ぜたところに、レクラムの意気込みが感じ取れることだろう。特に、ナポレオン解放戦争に従軍し21歳で戦死した詩人ケルナーに対しては、当時の人気もさることながら、「青年ドイツ派運動」に関わったレクラム個人の強い共感が働いたものと思われる。

以上の如く、レクラム文庫草創期のラインナップからは、いい意味で決して「客観的」とは言えない、通り一遍の「古典シリーズ」に終わらぬ、独自の「世界文庫」を構築していくにあたっての明確な意思が見て取れる。であるからこそまた、本文庫は数々の特徴を持つに至り、ドイツ国民に対する他国に例を見ぬ程の啓蒙活動が可能となったのである。以降では、文庫全体の特徴を列挙しながら、個々の点について系統的に分析していくが、その前にまず、レクラム書店そのものの他出版社との相違点について、手短かに触れてみたい。

### 3.2. レクラム書店自体の特徴

レクラム書店は、芸術・人文科学系出版社としてドイツ有数の老舗且つ大手であるにも拘わらず、平均的な文芸出版社の枠では捉え切れない運営方針を取っている。その中でも、文庫出版に関連する点を挙げると：

特徴1) 創立以来、特定作家との結び付きが希薄。

特徴2) 雑誌発行を、出版活動の看板としてはいない（出版書籍の大半がレクラム文庫）。

の2点を指摘することが出来よう。1)の点については、敢えて探せば若干の例外として、創業時のラウベとの交流や、1870/80年代の集中的なイプセン出版などが挙げられるが、例えばコックとゲーテ、シラーの、或いはフィッシャーとG.ハウプトマン、Th.マンとの深く長い交遊関係などに比較し得る関係を、アントン・フィリップやその子ハインリッヒは、どの作家とも築き上げなかった。2)の特徴に関しても同様である。文芸出版社は一般的に、文芸雑誌の出版を通じて社の出版活動に対する基本的なスタンスを明らかにし、同時に雑誌からの読者獲得を目指すことが多い。フィッシャー社が擁した“Freie Bühne”や、インゼル社の発行した“Der Insel”などがその典型的な例であろう。出版社の出版理念を、雑誌はより直接的に表現出来、加えてその同時性と広範性から、雑誌は一般図書に較べて、はるかに速効的なインパクトを大衆に与えることが可能となるからである。こういう雑誌の利点をフルに発揮して、“Freie Bühne”が自然主義を、“Der Insel”がユージュントシュティールを効果的に提唱・推進し、ひいては出版社そのものが、両文芸思潮の旗手として、出版界に確固たる地歩を固めていった訳である。

それに対してレクラム書店の発行した雑誌は、質・量共に社の命運をかけたものとは呼び難い。先述した創業期の2誌の内、“Leipziger Lokomotive”はごく短命に終わり、“Charivari”はさしたる注目を集めはしなかった。1896年には、アルフレッド・ハウシルト社から“Universum”の発行を引き継ぐが、この雑誌は中産階層を対象とした典型的な「家庭画報」であり、人文・社会・自然科学の分野を扱ってはいても、入門的且つ娯楽的な色彩が強い。題からも分かる通り、“Universum”はレクラム文庫の理念であるユニバーサリズムの平易な普及媒体であって、その発行部数（約75000部）や発行期間（1944年までの60年間）の割には、時の思潮にさしたる影響を

与えなかったというのが実情である。むしろ、1937年から39年までレクラム書店が「公に」引き継いだ“Deutsche Rundschau”の発行の方が、レクラム書店が当時の社会情勢、とりわけナチスに対して示した態度を探る上で興味深い。

1874年に創刊し、写実主義文学の舞台として当時の文壇をリードした“Deutsche Rundschau”は、20世紀初頭には市民社会に揺るがぬ地位を築いていた教養的総合誌である。“Universum”の上級誌ともいえるこの雑誌は、1939年以降、その反ナチ斯的論調により42年に発禁処分を受けるまで、別の出版社名で発行されていたものの、実際にはレクラム書店が印刷・発行を担当していた<sup>19)</sup>。その経緯について、ここで詳しく触れる余裕はないが、この雑誌運営にも見て取れるレクラム書店のナチスに対する態度は、大まかに形容すれば、「つかず離れず」の状態であり、他の大手出版社と較べて、とりわけ際立った対応の差を見せていた訳ではなかったということが出来る。ナチスの政権奪取により、ハイネ、アウエルバッハ、ベルネ、シュニッツラー、ヴェルフェル、ツヴァイクといったユダヤ系作家や、マン兄弟やフランクなどの反ナチス作家の文庫が1933年に焚書となっているが、この事態は他の出版社でも同様である。もっとも、後述するが、レクラム書店は第1次・第2次世界大戦と、戦時下を最も有効に活用した出版社のひとつであり、時の政府の意向と自社の出版理念の折り合いを、程よくつけることに成功していた。ナチスも、そのイデオロギーに背かぬ限りにおいては、古典をないがしろにすることは出来なかったため、レクラム文庫は潰滅的な打撃を受けることはなく、むしろ、焚書となった文庫の埋め草ともいえる軽い内容の本で、売上を伸ばした程である<sup>20)</sup>。(創刊75周年となった1942年の新刊発行部数は、過去最高の348万9000部を記録している。)しかし、上述の“Deutsche Rundschau”の例や、焚書となった文庫の在庫を密かに保持していた事実こそ、レクラム書店の反ナチス性(というより非政治性)を示唆するものであろう<sup>21)</sup>。創刊75周年を記念して出された「記念シリーズ」17篇(ヘルダー＝ゲーテ『ドイツの本質と芸術』[7497/98]からフリードリクセン『歩兵少尉』[7516]まで)の内、ひとつとして直接的に政治性・イデオロギー性を示す作品は採用されていない。それどころか、その中には、1944年のヒトラー暗殺計画に加担し処刑されたシューレンブルク(筆名「フリードリクセン」)の頌詞集が編まれている程である。ただ興味深いことだが、このシリーズには、日本の「忠臣蔵」譚が取り上げられている。“Die Verschwörung der 47 Samurai” [7507])日本から題材が取られること自体、レクラム文庫では非常に珍しいことを考え併せると<sup>22)</sup>、この選択は明らかに、当時の日独同盟の影響と考えられる。

この章の冒頭に挙げた、レクラム書店の出版活動が持つ2点の特徴は、ひとえに古典を重視した文庫出版を活動の中心に置いていることから来るものである。そうとはいえ、レクラムにとって文庫は、創刊当初の毎月10点という規則的な発行形態から見ても雑誌的な意味合いを有しており、その点でも流行作・話題作をある程度含む必要があった。しかしそこには、古典作品の出版を維持する、即ち会社の経営状態を一定に保つ狙いも強く、新進作家の支援・育成を多分に担う文芸雑誌とは、現代作家に対する距離が異なるのも当然である。我が国では、古典文庫としての格式を岩波文庫が確立したお蔭で、(今は必ずしもそうとはいえませんが)文庫に対して、書き手としての作家は、通常単行本以上の敬意を払うものである。ましてや岩波文庫以上の伝統を誇るレクラム文庫に対してならば、格別の権威を作者が感じ取っているかということ、実はそうともいえない。1880年後半には、『皇帝とガリラヤ人』の翻訳出版を巡ってフィッシャーとレクラムが先を争い、作者イブセンはフィッシャーからの出版を望むことになる<sup>23)</sup>。或いは1924年に、ホーフマンスタールが「一部3流作家からなるシリーズに加わりたくはない」由でレクラム文庫収録を拒

絶したエピソードもあり<sup>24)</sup>、作品発表媒体としてのレクラム文庫の地位は、古典文庫の実質には相応しいものではなかった様である。しかし、その様な評価さえ生んだレクラム書店の現実路線が、結局は1世紀以上に渡るほぼ文庫だけの出版活動を可能にしたともいえるのである。そう考えれば、ナチスに対する書店の関係も、この「現実主義」という言葉で総括することが出来よう。結果的に、文庫自体についても、ここでは若干触れることになったが、それでは以下にその特徴について詳述していきたい。

### 3.3. レクラム文庫自体の特徴

この特徴は、更に2種類に分類できる。

#### 3.3.1. 営業面から見た特徴

ここでは、書籍の体裁や販売方式といった文庫の「器」とも言うべき側面からレクラム文庫の独特な点を列挙し、解説していく。

#### 特徴3) 全巻通し番号制度、及びその制度を利用した独自の価格表示方法

3.1.でも触れたが、アントン・フィリップの考案により、レクラム文庫は創刊当初より出版された順に通し番号が打たれていった。しかも、このシステムを価格表示に応用するべく、1冊1番という形式は取らず、ページ数(約80ページ)を番数の基準にしたのである。即ち、長大な作品はそのページ数に応じて複数の番号を有することになる。例えば初の連番となったジャン・パウルの『ドクトル・カツェンベルガーの湯治旅行』(約190ページ)には、18と19の2つの番号が打たれているという具合である。レクラム書店が公に発表する出版「点」数とは、まさしくこの番号のみを指し、2000番や5000番などの数字を背負った文庫は記念版として出されたものだが、それが2000冊目、5000冊目の文庫を意味する訳ではない。このシステムでは、一つの番号に特定の価格が付けられ、番号を見ただけで本の価格が分かるようになっており、更に番号の数だけ背表紙には星が印刷され、価格表示が明確になされている。(この星表示の部分だけを岩波文庫は取り入れた訳である。)このシステムは単純明快の上なく、文庫自体の規模がある程度に納まり、物価も比較的安定していた戦前までは円滑に機能していたが、戦後には幾つかの欠点も露呈してきた。まず、厚い本を出せば出す程番号を「消費」し、その結果通し番号が飛躍的に増加する。次に、約80頁を一単位とする大まかな価格大系では、近年の激しい物価上昇の中で、合理的・効率的に価格を設定することが不可能となってきたのである。例えば、ゲーテ『ファウスト』第I部及び第II部は、創刊時には共にひとつの番号ながら、そのページ数は144ページと224ページである。第II部には多分に創刊記念の意味合いもあったろうが、現在この両文庫を同価格で販売することは不合理に過ぎよう。以上の理由から、1975年より通し番号と価格設定は分離され、各文庫は番号をひとつだけ有する形に改まり、空いた番号が新刊に振り当てられることとなった。そして1991年10月にレクラム書店はついに星(近年はブロック)による価格表示を諦め、より細分化された価格の直接表示とバーコード表示を導入したのである<sup>25)</sup>。この新価格では、『ファウスト』第I部は4マルク、第II部は7マルクとなっており、更に売れ行きに応じて個々の文庫の価格を小刻みに変更することも可能である。ドイツ出版界にあっては、価格を明示しないという「美德」が、専門書や上装本については今日尚守られているが、レクラム文庫に価格が明示されたことは、書籍の商品化が一層進みつつある感を新たにさせる出来事である。



## 特徴4) 独自の販売形態

ドイツの書店において、レクラム文庫は大抵専用の書架に配列されている。レクラムが専用書架を制作したのは1911年からであるが、同時にショーウィンドウ用の陳列棚も制作され、書店におけるレクラム文庫の差別化が意欲的に図られた。更に書籍出版史上画期的とも形容し得る試みが、翌年から設置され出した自動販売機であった(写真II参照)。現代でこそ書籍自販機というと芳しい印象を与えるものではないが、ドイツ最初のそれは、実にレクラム文庫専用販売機だったのである。レクラム文庫自体、駅構内の簡易書店に置かれたことはないが(今も昔もこういった書店で専ら売られる小説は「俗悪小説」[*"Schundliteratur"*]として教養層からは蔑視されている)、ユーゲントシュティール・デザイナーの大家であるペーター・ペーレンスのデザインしたこの流麗な外観の販売機は、駅やホテルやカフェやレストランといった、街の至る所に設置され、第1次世界大戦末にはその数にして2000を越えたといわれている。当時から既に、ボンボンといった菓子類の概念と直結していた自動販売機の分野に、敢えて文庫の販売機を参入させたレクラムの決断は驚嘆に値するが、そこには、レクラム文庫のイメージに傷をつけることなく、国内津々浦々まで販売網を広げること成功した独創的な戦略が認められる。販売機は通貨切替えに伴う技術的障害から、1940年頃までには全て撤去された。

そして、レクラム書店の営業史において最もユニークなものとして、第1次世界大戦中に売り出された「戦地用可搬文庫」(*"Tragbare Feldbücherei"*)を挙げたい。この文庫は任意のレクラム文庫100「点」からなり(ページを基準とした100点であるから、どの本を選ぶのが全体の分量は大体一定になる)、堅牢な木箱に収められて売り出された。読者は勿論前線の兵士であり、彼等は軍艦や要塞や野戦病院や、時には捕虜収容所の中でこれらの文庫を繙いたのである。同様の販売方式は第2次世界大戦時にも行われ、レクラム書店は莫大な利益を上げた<sup>26)</sup>。我々はこの事実を、レクラム書店が戦争を狡猾に利用したと見なすべきではない。むしろ、極限状態にあった兵士の心を癒したその功績こそ評価するべきだろう。事実、文庫各篇の内容としては、戦争プロパガンダ関係(例えば軍歌集など)よりも純粹な古典の方が好まれ、特に『ファウスト』が創刊以来最高の売れ行きを示したことから、有名な「背囊に『ファウスト』を」のスローガンが生まれ



写真II:1912年当時のレクラム文庫自動販売機

ることになる<sup>27)</sup>。しかしまた、その点を突いて、戦時下のレクラム文庫の影響力を、敵方やレジスタンス側が利用する事態も発生した。即ち、両世界大戦時に、レクラム文庫の体裁そのままの「偽レクラム文庫」が、反戦プロパガンダパンフレットとして、ドイツ国内に流布したのである。(印刷地はパリであることが多かった)それらは、題名(例えばビスマルク『帝国成立への戦い』)と内容(ドイツ国内での共産党員の活動報告)が全く異なる場合もあり、またシラー『ヴィルヘルム・テル』の原文抜粋から、降伏勧告文を作るなどといった巧妙なものまで見受けられる<sup>28)</sup>。以上の事件からも、レクラム文庫が戦時下において尚、——否平時にもまして——民衆生活に極めて密着していた書籍であったことが理解されよう。

### 3.3.2. 編集面から見た特徴

ここで扱う特徴は、レクラム文庫の内容に関してであり、最も本質的なものということが出来る。

**特徴5) 古典を主体としたユニバーサリズムを文庫構築の柱としていながらも、同時代性を失っていない**

本論では既に再三に渡り、レクラム文庫の古典出版に対する徹底性について述べてきたが、これら一連の説明の締めくくりに、作品がレクラム文庫に多数収録されている作家の現在の出版状況を調べたい。過去15冊以上がレクラム文庫から刊行された作家の出版冊数と、並べて括弧内にその内の絶版冊数を挙げてみる。

シェークスピア：48(1)	ゲーテ：37(0)	シラー：23(2)
プラトン：19(0)	モリエール：18(0)	ケラー：18(1)
フォンターネ：18(1)	レッシング：17(1)	ホフマン：17(0)
ワーグナー：17(0)	モーツァルト：15(0)	

(版を変えた文庫は同一と見なす)<sup>29)</sup>

上のリストからは、レクラム文庫が如何に古典を絶やさぬべく、身をくわいてきたかが見て取れよう。全体で247冊の内、絶版となったものは僅か6冊に過ぎない。つまり、現在絶版になっている作品の大半は非古典的・同時代的作品であるといえる(先に挙げた創刊時の10冊の内でも、ケルナー、ミュルナー、ハウフの3冊は絶版となっている。)のだが、翻れば、それだけまたそれらの作品も多数出版されてきたということである。

レクラム文庫に収録された文学作品は、大きく分類すると、3種類に区別することが出来る。即ち、1) 古典的作品、2) 同時代的純文学作品、3) 娯楽文学作品、の3種である。2) は主に、1920年から刊行が始まった存命中の作家による作品を指し、近年では、この分野の出版路線も、ドイツ最初の“Konkrete Poesie”(「視覚詩」)のアンソロジーを出すなど充実振りを示している。特に、東西ドイツ再統一後にレクラム書店も統合した現在は、旧東独のレクラム・ライブチヒ書店が、レクラム文庫としてではないものの、現代作品の出版を一手に担っていく計画である。(これは、改めて述べるべきレクラム書店の一大特徴であるのだが、レクラム書店は、第2次世界大戦後ドイツの分割により、シュトゥットガルトとライブチヒに恒常的な分裂を余儀なくされた唯一の出版社である<sup>30)</sup>。今まで述べてきたレクラム書店とは、戦後に限っては西側のレクラム・シュトゥットガルトを指している。紙面の都合でレクラム・ライブチヒ書店についての考察

は別の機会を待ちたいが、会社の再合併という難事業を、両レクラム書店は出版分野の明確な棲み分けという建設的な手段で乗り切りつつある。) 3) のジャンルに関しては、フモレスク(滑稽小説)やファルス(笑劇)を中心に、第2次世界大戦前までは盛んに出版されたが、現在はその使命を終了したと見なすべきだろう。今日ではそのほぼ全てが絶版となっており、レクラム文庫が読者に与えるイメージは、この点で少なからず変化してきている。そういった状況の中で、1887年に初めて挿絵付きで出版されたフモレスク『学生牢への訪問』(エックシュタイン[2340])が、一世紀以上出版され続けたのは、当時の風俗を知る上で貴重であった。(この文庫も、最近ついに絶版の憂き目を見ることになった。残念という他はない。)

#### 特徴6) 戯曲・歌劇台本の重視

5) のリストをもう一度眺めると、11人の作者の内7人が、劇作家或いはオペラ作曲家であることが見て取れよう。創刊時の10冊も、7冊が戯曲で占められており、レクラムが戯曲やオペラ台本を、如何に出版活動の中心に据えていたかが推察される。もっとも、古典作品に占める戯曲の割合が、他の文学ジャンルの及ぶところではないことから、このような状況は説明出来るだろうが、レクラム文庫の戯曲出版は、もうひとつ別の任務を担っていた。

創刊時から、特に世紀転換期までのレクラム文庫の戯曲重視を考える際、当時の所謂「素人劇」(“Laienbühne” 或いは “Dilettantenbühne”) プームを無視する訳にはいかない。この傾向は、3月革命の不成功が密接に関連しており、自らのアイデンティティー喪失の危機に陥った国民の内に、自己表現の場として素人劇、とりわけ非政治的な人情喜劇が流行したものと考えられる<sup>31)</sup>。素人劇を稽古するにあたって、各役者が他の役の台詞にも目を通すことが出来る廉価版台本として、レクラム文庫はうってつけの存在であり、レクラム書店も、この傾向に乗じて、実に様々な戯曲を文庫に採り入れ、専用の目録も用意した。これらの目録には、一般の目録では触れられていない、筋、役者の数と種類、舞台装置の規模、衣装の内容などが詳しく紹介されており、明らかに素人による上演を想定したものであることが分かる。その挙げ句には、舞台での小道具の扱いから、抱擁、接吻、平手打ちの仕方に至るまで、呆れる程事細かに説明した『素人劇上演の手引き』(ヘルプスト/ヴィットマン [2778])なる解説書までが登場した程である<sup>32)</sup>。

また、劇場での演劇やオペラの鑑賞補助として、レクラム文庫が果たした役割も計り知れない。劇場内で販売される高価なパンフレットにも、テキスト全体が収録されることは稀であるため、安価で携帯に簡便なレクラム文庫は、観劇愛好者にとって必需品となっている。レクラム書店自身、この役割を強く意識しており、特に他社が殆ど手掛けていないオペラ台本に関しては、解説書と共に極めて充実した陣容を誇っている。ある意味では、人文科学を中心としたレクラム文庫は、この分野で最も実用的な機能を果たしているといえようし、ヨーロッパでの戯曲を中心とした伝統的な文学受容の一翼を担い続けてきたのである。現在でも古典的作品上演の際の売店で、パンフレットの横に黄色いレクラム文庫が並べられる様子は、ドイツの一般劇場なら何処でも目にする光景だろう。

#### 特徴7) 徹底した教育・啓蒙性

レクラム書店からは、高度な専門書は全くといっていい程出版されていない。レクラム文庫はその典型であり、文庫の使命は徹頭徹尾「教育・啓蒙性」に集約されている。(この点も、専門書を多数出版している岩波書店との相違である。)中でも学校教育現場での利用は、何処にも謳われ

てはいないものの、創刊当初からレクラム文庫の大きな目的であった。折しも 1871 年にドイツは統一を果たし、「ドイツ学」(“Deutschkunde”)に対する教育的気運が最高潮に達していた事もあって、学校におけるドイツ語授業とドイツ文学講読に対する要求は、国を挙げて高まりを見せていた矢先でもあった(高等教育機関では、19 世紀半ばまで、いまだにラテン語とギリシア・ローマ古典文学が、科目内に大きな比重を占めていた)。レクラムはこの機を逃さず、各州文部省、特にプロシア文部省の教育指針に敏感に反応した文庫出版活動を展開する(それはとりわけドイツ古典、歴史、地理そして公民に重点が置かれていた)。更に 1883 年には、シラー『バラード撰集』が、バラードの解説から作者・作品の解説までを盛り込んで、総合的な授業用副読本として出版された。この文庫ジャンルは結局シリーズ化されなかったが、1896 年に始まったシリーズ「ドイツ文学名作解説」(“Erläuterung zu Meisterwerken der deutschen Literatur”)を経て、現在の「解説と資料」(“Erläuterung und Dokumente”)や、「授業用参考資料集」(“Arbeitstext für den Unterricht”)や、「作品解釈集」(“Interpretationen”)や、近年開始された「学生用作家解説」(“Literaturwissen für Schule und Studium”)シリーズなどに直接連なるものである。

また、前項で素人演劇用目録については触れたが、そもそも第 2 次大戦前のレクラム文庫に関しては、ジャンル別に極めて多彩な目録が用意されており、中でも「学生用推薦文庫」(“Leseplan”)のリストは、最も広範に流布した目録のひとつである。戦後のジャンル別目録で残ったのはこのレーゼプランのみであって、それも更に小学校用、ギムナジウム前期用、同後期用など、より一層細分化し、政府の教育指導要綱改編にも敏速に対応したものとなった(因みに、一篇のレーゼプランで推薦される文庫は 200 冊前後)。以上の事実からも、レクラム文庫が戦後一段と教育活動にその重心を移していることが理解されよう<sup>33)</sup>。そしてその教育活動とは、ゲルマニスティクのみならず、アングリスティックやロマニスティクにまで拡大しつつあることが、1970 年より刊行され始めた 2 か国語版や 83 年から出された外国語版から窺える。今では、フランス文学に関して半数以上が、またギリシア・ローマ文学や英米文学作品は、実にその 7 割以上が 2 か国語乃至原語のみで出版される程にまで原語出版が進められている。

学校を特定の対象としない啓蒙的出版活動の代表は、ガイドブックシリーズである。1928 年の『オペラガイド』から始まるこのシリーズは、(余りにも頁数が多いために)文庫の通し番号を打たれてはいないものの、装丁・サイズからみても文庫の延長と見なすのが妥当であろう。このシリーズは、音楽の各ジャンルを始め、美術、演劇、映画など、40 冊以上の規模を誇り、この分野の廉価版芸術ガイドとしては他社の追随を全く許さない。更に 1990 年からは、その名も「知識」と銘打った文庫シリーズが開始され(“Reclam Wissen”),自然・人文・社会科学の各分野における小辞典や入門書が次々と編まれつつある。

最後に毛色の変ったシリーズとして、チェスの関連書を挙げておきたい。この分野は現在も数冊を数えるのみで、際立った充実振りを見せている訳ではないが、既に 1 世紀以上前に刊行が開始された、文庫内でも最も伝統的な分野のひとつなのである。中でもドゥプレスネ/ミーゼスによる『チェス教本』[1407-15/15 a]は、1881 年の初版発行以来、今日までに 29 版を数えるスタンダード教本として、レクラム文庫中の隠れたベストセラーとなっている。

全体ドイツ出版界は、近代文学揺籃の地として、初学者向きから専門家用まで、二次文献の充実之余念がない。(その結果が、小論冒頭で紹介した、異常な程長期に渡るシリーズ刊行ともいえよう)大学レベルの文学研究参考資料叢書となると、人文系新書の大系である“Sammlung Metzler”や、作品注釈の決定版ともいえるヴィンクラー社の“Kommentar”シリーズ、或いは

テーマ別論文集である“Wege der Forschung”などが定番となろうが、レクラム文庫の手厚い参考文献部門はそれらの基礎段階として、特にギムナジウム以上での授業を強力に支援してきた。大学のゲルマニスティクゼミにおいても、レクラム文庫がテキストや参考文献に指定されることは依然として少なくない。この文庫内でのみ廉価版やテキストそのものが入手可能な作品も近年とみに増えてきており、とりわけ自然主義や世紀転換期文学及びスラブ系文学に関して、レクラム文庫が持つ意味は並々ならぬものがある。

#### 4. まとめ

レクラム文庫を“Paperback”（ドイツ語では“Taschenbuch”）と呼ぶ者はいない。1935年にイギリスで創刊された「ペンギンブックス」を源流とするペーパーバック文化は、アメリカを経由して瞬く間に世界を席卷し、1946年にはドイツでも同体裁の叢書「ロ・ロ・ロ（ローヴォルト輪転機小説叢書）」（“Rowohlt's Rotations Romanen”：それまでの書籍と異なり、安価な新聞用紙に輪転機を使って印刷したためこの名称がついた）が誕生する。爾来、ドイツにおいてもペーパーバックは廉価版書籍の主流となり、書籍サイズと共に、現代文学作品の出版については、戦前のレクラム文庫のお株を完全に奪い取った感がある。必然的に現今の文庫には、「古典名作文庫」のイメージが色濃くつきまとうことになるが、その根底には、独創的販売システムや編集方針の伝統に裏打ちされた革新性が息づいているのである。シリーズ別に一面赤、青、黄、緑などの純色に塗り分けられた表紙（真っ赤な古典文庫など、我々は想像出来るだろうか）を持つ小冊子は、我が国の文庫本とは比較にならぬ程みずぼらしい。そこには、例えば岩波文庫で謳い上げられた如く、「古今東西の不朽の名著を万人に提供せん」（「読書子に寄す」）といった高邁な気負いも誇りも感じることはあるまい。だが、国民の教育・啓蒙（そして良質の娯楽）という使命の為には、ソフト面でもハード面でも体裁を気に懸けぬ合理主義、或いはしたたかさが見て取れよう。自動販売機やジャンル別目録などは、現在も我が国では、娯楽雑誌専門販売機であったり漠然とした「～文庫の100冊」という目録であったりと、当時のレクラム文庫のレベルにまでは達していないのではないだろうか。更には、小論では割愛したが、葉やポスターやパンフレットを駆使した広告活動や、現在角川書店が出版し始め話題を呼んでいる「ミニ文庫」まで、レクラム書店は半世紀以上前にその先鞭をつけているのである<sup>34)</sup>。そして現在、総合メディアとして登場したCD-ROM版レクラム文庫が、ドイツ文学受容の新たな模索を始めている。

以上の事項を総括すると、レクラム文庫の理念とは、ひと言でいえば「実用性を常に見据えた教養文庫の構築」と定義することが出来よう。しかし、ここでの「実用性」とは実社会上の個別的状况を処理する「実用性」とは些かの関わりもない。レクラム文庫にとっては、「教養」を「教養」故に如何に効率的に身につけるかが問題なのであって、そこへの多岐に渡るルート——原典であれ、注釈書であれ、台本であれ、ガイドであれ——そのものが、この内在的な価値を担い合っているのである。これ程一般教養的な内容を持ちながら、また同時に、社会の様々な階層が様々な場面で繙く叢書も他に例を見るまい。

「真の教養とは何らかの目的の為の教養ではなく、完全を求めるあらゆる努力と同様、自らの内にその意味を持つものである。」<sup>35)</sup>

H. ヘッセの以上の言葉が示す様に、「教養」という保守的且つ内在的な目的を、ひたすら革新的に追い求めてきたレクラム文庫は、1996年現在2329冊が入手可能である。

註

1. ドイチャー・クラシカー版が出される前にも、国民版と並行してハンザー版シラー全集全5巻（1980-86）が刊行されており、現在も絶版にはなっていない。即ち、今日学問的に信用の置ける原典批判版が、シラーに関しては3種類出版されていることなる。
2. リヒャルト・ズォーツマン：19世紀世紀転換期の詩人・翻訳家。家庭画報“Gartenlaube”及びレクラム書店発行の総合誌“Universum”を主な活動の場とした。ダンテの翻訳でも有名。
3. 我が国でも岩波文庫創刊の折に、『思想』誌上において、佐藤通次氏がレクラム文庫の沿革を紹介している。ただ、この紹介は本人も認めている通り、A.バルテルスがレクラム文庫6000番達成を記念して著した『世界文学案内』の序文を要約したものである。／佐藤通次『レクラム文庫の沿革』（『思想』71号[1927], 996-1002頁）。／Adolf Bartels, Weltliteratur. Eine Übersicht zugleich ein Führer durch Reclams Universal-Bibliothek. Erster Teil, Leipzig o.J.(Reclam UB 5997-5999), S.3-16.
4. カール・ハインリヒの父も1802年より書店を経営しており（“C.H.Reclam sen.”）、この書店と区別する為に、現レクラム書店の社名には“jung”が付け加えられている。
5. 当時は書籍出版業者同志の婚姻が多く、アントン・フィリップの母はカンペ家の出身であった。更にブロックハウス家やヴェスターマン家とも、レクラム家はカンペ家を通じて縁戚関係にある。
6. 150 Jahre Reclam.Daten, Bilder und Dokumente zur Verlagsgeschichte 1828-1978, Stuttgart 1978, S. 16-23.
7. Peter de Mendelssohn, S.Fischer und sein Verlag, Frankfurt a.M. 1986, S.71.
8. 150 Jahre Reclam, S.24-25.
9. 現代への貨幣価値換算は、1928年当時に1858年発行のレクラム版シェークスピア全集を1部4.5マルクと換算したエルスターの論文と、当時のレクラム文庫の星ひとつが40ペニヒであったことから推算している。当時の貨幣価値は、現代では様々に換算し得るが、いずれにせよ、2グロッシェンは2ターラーの24分の1である。／Hans Martin Elster, Hundert Jahre Reclam, in: Die Horen Nr.5 (1928/29), S.91-94.
10. 著作権保護期間は、後に2度の延長を経て、現在ドイツでは70年となっている。
11. レクラム文庫最初の広告より。写真I参照。
12. de Mendelssohn, S.505-507.
13. 「マイヤー国民文庫」は、1915年に廃刊するまで1698点を刊行した。
14. 第2次世界大戦後、本社をシュトゥットガルトに移した「西ドイツ」レクラム書店は、レクラム文庫を1948年に7611番から再開する。7610番以前の文庫で戦後絶版となったものは、それ以降の文庫より当然の如く圧倒的に少ないが、特に100番まではこの半世紀に2冊しか絶版にはされていない。
15. 初版で刷られた5000部は4週間足らずで売り切れ、今日まで「ファウスト」の売り上げは400万部以上に上っている。／Faust, seit 120 Jahre die Nr.1 (Broschüre der Reclam Universal-Bibliothek), Stuttgart 1987.
16. ebenda.
17. 150 Jahre Reclam, S.32.
18. ebenda, S.34. (写真I参照)
19. ebenda, S.156.
20. 当時のレクラム文庫は、ヒトラーの演説集やナチスのイデオログによる論集なども発行したが、それらが売り上げにさしたる貢献をした訳ではなかった。
21. Georg Ruppelt, Die Universal-Bibliothek im “Dritten Reich”. Zwischen Anpassung und Abstand, in: Reclam 125 Jahre Universal-Bibliothek 1867-1992, Stuttgart 1992, S.331-357.
22. 第2次世界大戦後暫く、レクラム文庫から刊行される日本文学は『伊豆の踊り子』、『更級日記』、『新古今和歌集』の3点のみだったが、近年『日本犯罪小説集』、『俳句集』及び『短歌集』が加えられた。
23. de Mendelssohn, S.79.
24. 150 Jahre Reclam, S.132-133.
25. Reclams Universal-Bibliothek Stuttgart 1947-1992. Eine Bibliographie, Stuttgart 1992, S.583-585.

#### レクラム文庫の特徴と理念

26. 概数ではあるが、1942年にレクラム書店は935000マルク——貨幣価値は現在の10倍以上——の利益を上げたと伝えられている。/Ruppelt, S.345.
27. 150 Jahre Reclam, S.118.
28. Ruppelt, S. 341.
29. Vgl. Reclams Universal-Bibliothek Stuttgart 1947-1992.
30. 第2次世界大戦後に分裂した書店としては、他に連合国の各占領地区で営業許可を取り、都合4社に分かれたローヴォルト書店の例があるが、その分裂期間は4年間に過ぎなかった。/山口知三, 平田達治, 鎌田道生, 長橋美美子『ナチス通りの出版社』, 人文書院 1989, 215-218頁。
31. Klaus H. Hilzinger, Die Universal-Bibliothek und das Liebhabertheater des19.Jahrhunderts, in: Reclam 125 Jahre Universal-Bibliothek 1867-1992, S.67-81.
32. 例を挙げれば、恋人役同志による「抱擁」は以下の通り：「男優が相手の女性の右に立つ場合、彼は彼女に歩み寄り、彼の左足を彼女の背後に置き、同時に腕を彼女の腰に回してその左手を掴むと宜しい云々。」/ebenda S.72.
33. Andreas Lerne, Die Universal-Bibliothek und Schule, in: ebenda.S.299-330.
34. レクラム文庫の広告については、エーヴァルトの論考に詳しい。/Georg Ewald, Werbebeilage in Reclams Universal-Bibliothek, in: ebenda, S.245-257./「ミニ文庫」は1943年、戦時下の紙不足の折、前線の兵士へ封書に同封して送ることが出来る様にと考案された。頁数は20頁程度で価格は10ペニヒ。
35. レクラム文庫7000番を記念してヘッセが書き下ろしたレクラム文庫選である『世界文学文庫』冒頭の言葉より。/Hermann Hesse, Eine Bibliothek der Weltliteratur, Stuttgart 1996 (Reclam UB 7003), S.3.

#### 参考文献

- Reclam Verfasser, Schlag- und Stichwortkatalog, Stuttgart 1992.
- Fritz Schlawe, Literarische Zeitschriften Teil 1, Stuttgart 1965.
- Fritz Schlawe, Literarische Zeitschriften Teil 2, Stuttgart 1973.
- Monika Estermann/Michael Knobe (hrsg.), Von Göschen bis Rowohlt. Beiträge zur Geschichte des deutschen Verlagswesens, Wiesbaden 1990.
- Reiner Stach, 100Jahre S.Fischer Verlag 1886-1986, Frankfurt a.M. 1991.
- 岩波文庫総目録 1927-1987, 岩波書店 1987.

なお、小論で現在のものとして挙げられている数値は、特に断りがない限り1992年現在のものである。

文庫タイトルに続く数字は、その文庫に打たれた通し番号を示す。

最後に、小論を執筆するにあたってレクラム書店支配人ディートリヒ・ボーデ氏並びに近畿大学教授岩切利雄氏に貴重な資料を御提供頂いた。ここに深くお礼申し上げたい。